



**コレクション展 鷗外と子どもたち
—於菟、茉莉、杏奴、類が語るパパ**
2026年1月18日（日）～3月31日（火）
開催のお知らせ

4人の子どもたちの言葉から、文学者でも陸軍軍医でもない、優しい「パパ」としての鷗外を紹介。

文京区立森鷗外記念館では2026年1月18日（日）～3月31日（火）まで、コレクション展「鷗外と子どもたち—於菟、茉莉、杏奴、類が語るパパ」を開催いたします。

三男二女に恵まれた森鷗外は子煩惱でした。次男・不律（ふりつ、1907～1908）は幼いうちに世を去りますが、長男・於菟（おと、1890～1967）、長女・茉莉（1903～1987）、次女・杏奴（あんぬ、1909～1998）、三男・類（1911～1991）は、鷗外の深い愛情に包まれて成長しました。1922（大正11）年に鷗外が60歳で死去した後、4人は父・鷗外への思いを胸に、自らの人生を歩んでいきます。

昭和に入ると、鷗外に関する隨筆の執筆依頼が舞い込むようになり、4人はそれぞれの言葉で、文学者でも陸軍軍医でもない、愛する「パパ」（家族が呼んだ愛称）を語り始めます。また、環境の変化やアジア太平洋戦争を乗り越え、鷗外遺品（愛用品、日記、原稿、書簡など）の継承に努めます。1962（昭和37）年に於菟自らが、2006（平成18）年には杏奴のご遺族が文京区に寄贈した遺品の数々は、当館所蔵資料の核となりました。

本展では、子どもたちの隨筆に見える父親としての鷗外を紹介します。そして、於菟と杏奴から受け継いだ館蔵の鷗外遺品を、子どもたちの回想と共に展覧します。於菟、茉莉、杏奴、類が語り伝えてきた「パパ」への思いをご覧ください。

■開催概要

展覧会名：コレクション展「鷗外と子どもたち—於菟、茉莉、杏奴、類が語るパパ」

会期：2026年1月18日（日）～3月31日（火） 計66日間

休館日：1月26日（月）・27日（火）、2月24日（火）～26日（木）、3月23日（月）・24日（火）

開館時間：10時～18時（最終入館は閉館30分前まで）

会場：文京区立森鷗外記念館 展示室2

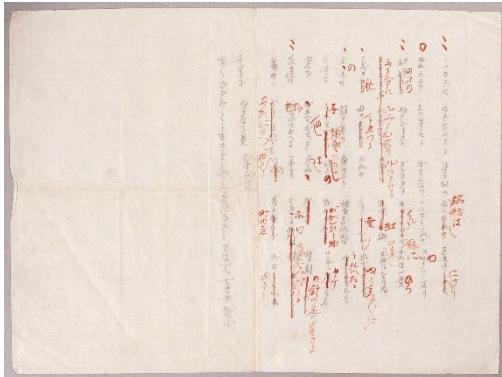
観覧料：一般 300円（中学生以下無料、20名以上の団体：240円）

主催：文京区立森鷗外記念館

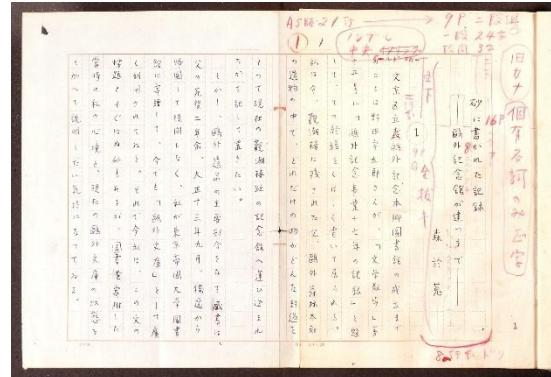
報道関係各位

■主な展示資料

①



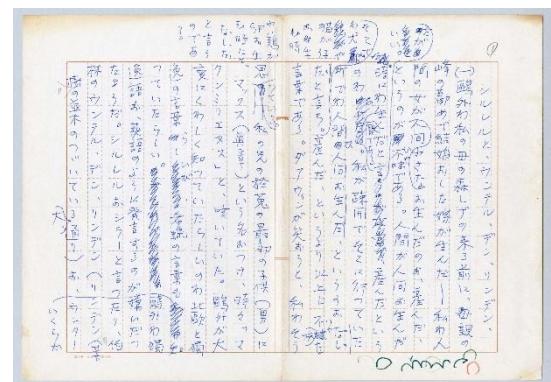
②



③



④



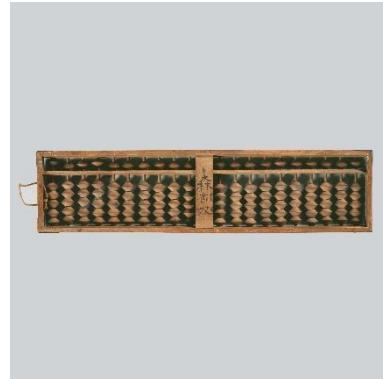
⑤



⑥



⑦



①杏奴短歌草稿、鷗外添削 大正期 杏奴が詠んだ短歌に鷗外が朱筆で添削している。

②於菟自筆原稿『砂に書かれた記録』 1965年発表 鷗外没後、遺品を守り、最終的に文京区へ寄贈するまでの経緯を記した隨筆。

③類自筆原稿『散歩』 1967年発表 大人になった類が鷗外と再会し散歩をする夢を描く。鷗外との記憶が少年時代で止まっている類が、夢のはなしとして鷗外への思慕を綴る。

④茉莉自筆原稿『ドッキリチャンネル（シルレルとウンテル・デン・リンデン）』 1982年発表 雑誌「週刊新潮」に連載していたテレビ評。鷗外が学問や文学のことを考える時の目は「鋭くて射るよう」と回想する。

⑤四人の隨筆集 左上から時計回りに、於菟『木芙蓉』 時潮社 1936年、茉莉『父の帽子』 筑摩書房 1957年、杏奴『晩年の父』 岩波書店 1936年、類『鷗外の子供たち』 あとに残されたものの記録』 光文社 1956年。

⑥鷗外旧蔵双六盤 鷗外が妻・志げと母・峰子の不仲を案じて購入したとも言われ、於菟ら子どもたちも共に遊ぶことがあった。

⑦杏奴旧蔵そろばん 大正期 中央の「森杏奴【アンヌ】」は鷗外の筆による。



右から於菟 44歳、茉莉 31歳（後列）、杏奴 25歳、類 23歳（「婦人之友」28巻3号 1934年3月より）

森 於菟

1890（明治23）～1967（昭和42）年。医学博士、解剖学者。鷗外と最初の妻・登志子との第一子（長男）。東京帝国大学医科大学、同大学理学部卒業。東京帝国大学助教授を経て、1936（昭和11）年に台北帝国大学医学部教授に就任。1947（昭和22）年に帰国後は、東邦大学医学部教授、医学部長等を務めた。

森 茉莉

1903（明治36）～1987（昭和62）年。小説家、随筆家。鷗外と志げの第一子（長女）。仏英和高等女学校卒業。昭和始め頃から仏文学の翻訳、劇評などを手がけ、のちに随筆を執筆するようになる。1957（昭和32）年、54歳の時に『父の帽子』を刊行し日本エッセイストクラブ賞を受賞。その後、『贅沢貧乏』などの随筆、『恋人たちの森』『甘い蜜の部屋』などの小説を次々と発表した。

小堀 杏奴

1909（明治42）～1998（平成10）年。随筆家。鷗外と志げの第三子（次女）。仏英和高等女学校卒業。長原孝太郎や藤島武二のもとで絵画を学び、1931（昭和6）年に弟・類と共に渡仏。帰国後、洋画家・小堀四郎と結婚。兄弟の中で最も早く、鷗外との思い出を綴った随筆を発表し、1936（昭和11）年に『晩年の父』を刊行。その後も、鷗外や家族をテーマとした随筆を多く残した。

森 類

1911（明治44）～1991（平成3）年。随筆家。鷗外と志げの第四子（三男）。杏奴と共に絵画を学び、1931（昭和6）年に渡仏。戦後まもなく文筆活動を始め、詩や随筆を発表。1931（昭和26）年、観潮樓跡地で書店「千葉書房」を開店。1956（昭和31）年、『鷗外の子供たち あとに残されたものの記録』を刊行した。

■ミニ展示ガイド発売

展示解説、資料キャプションなどを収録したミニ展示ガイドを、開幕日1月18日（日）より館内ショップにて販売します。通信販売にも対応しています。

B5判・12頁 価格：税込300円 発行日：2026年1月18日（日）

■関連事業

○講演会「父と子」

父の子どもへの溢れるばかりの愛は、どのようなかたちとなってあらわれるのか。

その愛のゆくえを、お話しいただきます。

講師：太田 治子 氏（作家）

日時：2026年2月22日（日）14時～15時30分

料金：無料（参加票と本展観覧券（半券可）が必要）

会場：当館2階講座室

定員：50名（事前申込制）

○ギャラリートーク

展示室にて当館学芸員が展示解説を行います。

日時：2月11日（水・祝）、3月11日（水）14時～（30分程度）

※申込不要、高校生以上は当日の展示観覧券が必要です。

■同時期開催

○鷗外誕生日記念 無料観覧日

鷗外164回目の誕生日を記念して、2026年1月19日（月）は無料で展覧会をご覧いただけます。

森鷗外とは

1862（文久2）～1922（大正11）年。陸軍軍医、小説家、翻訳家、医学博士。本名・森林太郎。

現在の島根県鹿足郡津和野町に、津和野藩主・亀井家の典医を代々務めた森家の長男として生まれる。1872

（明治5）年に10歳で上京。東京大学医学部を卒業後、陸軍軍医となる。1884（明治17）年、ドイツ留学。

帰国後の1889（明治22）年に共訳詩集『於母影』を、翌年に小説『舞姫』を発表し文壇で名声を高めた。

1907（明治40）年、陸軍軍医総監、陸軍省医務局長に就任。公務の傍ら、『青年』『雁』『山椒大夫』『高瀬舟』

『渋江抽斎』などを執筆した。

文京区立森鷗外記念館とは

森鷗外が1892（明治25）年から没する1922（大正11）年までの30年間を過ごした、邸宅「觀潮樓」跡地に建つ記念文学館。鷗外生誕150年目に当たる2012（平成24）年に開館した。敷地内には鷗外生前の風景を偲ばせる大イチョウ、庭石（通称「三人冗語の石」）、正門跡の敷石などが遺る。地下一階展示室で年間4回開催している企画展と、様々なイベントをとおして、鷗外の生涯や業績を顕彰している。